

北海道偕行会の「特別講演会」 修親会員を招いて

北海道偕行会は2月10日、ジャーナリストの井上和彦氏を講師に迎えて、「国民の期待と自衛隊」と題する講演会を、札幌（ネストホテル札幌駅前）で開催した。本企画は、井上先生が日本会議に招かれて来札される事を耳にし、特にお願いで実現したものである。

当会は昨年11月の全道大会の際、札幌駐屯地修親会々長のご理解のもと、前段行事「講演」に現職幹部13名の出席を得た。現職との交流第2弾として企画したのがこの「特別講演会」である。案内の範囲は、会員が概ね札幌・恵庭・千歳地区、修親会員は札幌市内4駐屯地に限ったが、会員が22名、修親会から88名の参加を得た。第11旅団長・真駒内駐屯地司令・丘珠駐屯地司令・方面警務隊長・情報保全隊長・総監部総務部長などにも出席いただいたのは有り難いことであった。

井上先生はまず「国民の自衛隊に対する目線は上がっている」と強調された。自衛隊への評価は間違ひなく上っており、視点そのものも変化して、本来任務

における精強性や規律性に注目しているが、マスコミの目線はあい変わらずだから、インターネットで情報収集する国民の目線との間に乖離（かいり）を生じているのだと。



講師 井上和彦先生

次いで豊富な取材映像にもつき、災害派遣や海外任務時の隊員の真摯な姿勢と被災者や現地住民の感謝の具体例を多数紹介された。被災地で連隊長に抱きつく子供たちやお礼の手紙、ODAで作られた「きづな橋」の欄干の目の丸が印刷されているカンボジアの紙幣、撤収部隊を見送るサマワ市民の横断幕「Honest Japanese : All of us are with you for rebuilding our safe city」などが印象に残る。

更に、日本人は幕末以来「人材の発掘と教育」に努め、委任統治領でも住民の初等教育に力を入れたことが、パラオでは今でも実感できることなどを紹介された。日本の近代史は悪くいわれることが多いが、事実をよく調べれば決してそうではない、との趣旨である。

修親会員にはアンケートに回答いただいたが、「現役も知らないことがあり有益だった」「使命感を改めて呼び起こされた」「偕行会との連携に協力してゆきたい」等の所見があり、この講演会の意義を確認できた。各駐屯地等に配布している「偕行」はある程度閲覧されているが、「偕行」の定期購入制度があれば利用を検討したい」との回答も5割以上あった。



熱弁と傾聴

このような制度は、現職との連携の強化や将来の偕行社入会にもつながることであるから、偕行社としてもぜひ検討し実現していただきたいと思います。

当会は今後とも、現職にとっても有益なこのような企画を通じて、会の存在意義を高め活性化を図りたいと考えている。